

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 大里東小 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

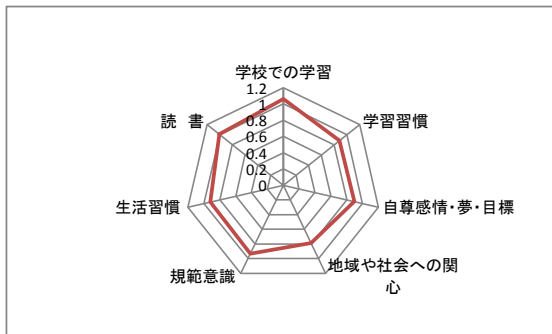
国語A	全体的な傾向や特徴など	本年度の本校平均正答率は、本市平均正答率より11ポイント下回っていた。手紙の書き方、俳句、ことわざ、古文など普段あまり生活の中で使うことのない問題にもしっかりと目を向け、慣れ親しむ指導を図る必要がある。また、漢字の読み書きは繰り返し練習させる必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	互いの話を聞き、考えの共通点や相違点を整理しながら、進行に沿って話し合う問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	俳句の情景を考える問題や古文における言葉の響きやリズムを楽しみながら読む問題は正答率が低かった。	

国語B	全体的な傾向や特徴など	本年度の本校平均正答率は、本市平均正答率より9ポイント下回っていた。全体的に記述式の問題に課題がある。書ける児童と書けない児童の二極化が目立っている。書くことが苦にならない取組をさらに継続していく必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	物語を読み、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じ、必要な内容を整理して書く問題は正答率が低かった。	

算数A	全体的な傾向や特徴など	本年度の本校平均正答率は、本市平均正答率より6ポイント下回っていた。算数の指導の基本は「教えて、考えさせる」ことであるから、今後も基礎的基本的な知識(意味理解)・技能(方法理解)を確実に習得させる必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	加法と乗法の混合した整数と小数の計算をする問題の正答率は高かった。	
	努力が必要な問題	高さが等しい平行四辺形と三角形について、底辺と面積の関係を理解する問題は正答率が低かった。	

算数B	全体的な傾向や特徴など	本年度の本校平均正答率は、本市平均正答率より9ポイント下回っていた。全体的に記述式の問題に課題がある。何をどのように書けばよいのかを教え、書いて説明することを習慣化させる必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	割合を比較するという目的に適したグラフを選ぶ問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	身近なものに置き換えた基準量と割合を基に、比較量を判断し、その判断の理由を記述する問題は正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
○「学校の宿題をしている」児童の割合は9割を超えていたが、「自分で計画を立てて勉強している」児童の割合は4割程度であった。全校で自主学習の時間の目安(10分×学年)を示したり、個に応じた自主学習の量・内容・出し方を工夫したりすることで、自主学習の習慣を定着させる必要がある。
○「自分には、よいところがあると思う」児童の割合は6割程度であった。学校行事や学級活動において、満足感・充実感を得られたり、成功体験を増やしたりできる取組を行い、一人一人の頑張りやよさを認め、ほめて伸ばす指導を今後も継続していく。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

○授業の質を変える → わかる授業づくり5つのポイントの徹底、若年教員を中心とした校内研修の実施
○読書タイムの質を変える → 時間いっぱい1冊の本を・活字に慣れ親しむように(学習漫画・図鑑は読まない)
○朝学習の質を変える → 月:新聞の読み取り 水:計算 木:MIM・ローマ字 金:音読暗唱(全校一斉実施)
○補充学習の充実 → 学力定着サポートシステムの活用、ひまわり学習塾での担任による指導員補助

② 家庭生活習慣等に関する取組

○宿題のスタンダード化 → 自主学習ノートの活用し、「書く」ことを習慣化させる内容(日記・今日の学習のふりかえり など)を取り入れる。
○全国学力・学習状況調査の課題と取組等を保護者へ周知する。(学校便りや学校HPで)
○小中連携の学力向上の取組 → 中学校の定期考査前の時期に合わせて、家庭学習により一層取り組むように保護者に呼び掛ける。
○地域の人材の有効活用 → 学校は地域の方に支えられているという意識や関心をもたせる。